

『こんにちは赤ちゃん事業』の成功に必須な
健康な家族アメリカ(HFA)の「12 重大原則」の講演録

2007年5月28日 東京ウィメンズプラザ会議室にて

講演者 シドニー・ウェッセルさん (HFA 質の確認と認定課課長)

〃 ケート・ウィタカーさん (HFA 西部地区支部長)

コーディネーター兼通訳者 ヘネシー澄子さん (東京福祉大学名誉教授・社会福祉学
博士・NPO 法人里親子支援のアン基金プロジェクト理事長)

主催 NPO 法人 里親子支援のアン基金プロジェクト

はじめに

「健康な家族アメリカ (HFA= Healthy Families America)」から学ぶ家庭訪問員の力量

オレンジリボンネット管理人 箱崎幸恵

2007年5月28日、東京、渋谷にある、東京ウィメンズプラザの会議室で、アメリカの新生児家庭訪問事業、「健康な家族アメリカ (HFA)」のスタッフが来日し講演会をしました。

講演会のテーマは、『こんにちは赤ちゃん事業』の成功に必須な健康な家族アメリカ(HFA)の12重大原則』です。

HFAのスタッフである、シドニー・ウェッセルさん(HFA 質の確認と認定課課長)と、ケート・ウィタカーさん(HFA 西部地区支部長)、NPO 法人里親子支援のアン基金プロジェクト理事長でソーシャルワーカーのヘネシー澄子さんが、HFAのプログラムの内容について講演しました。

この講演会の模様は、福祉新聞に掲載されました。記事は本サイトのトピックスで見られるので、是非ご覧下さい。

「健康な家族アメリカ(HFA)」とは、1991年にハワイで始まった、新生児家庭訪問事業のプログラムです。ハワイから全米に広がり、「健康な家族アメリカ」という市民と行政を交えた運動となって発展していきました。HFAは、コロラド州の医師で、最初に被虐待児症候群(battered child syndrome)という言葉を発表して、子ども虐待の深刻さを伝えた、小児科医の故ヘンリー・ケンブ医師が考案した家庭訪問の方法です。

講演会を主催した NPO 法人里親子支援のアン基金プロジェクトは、経験を積んだ里親がピアサポートの視点から里親の相談にのる家庭訪問をする事業を行うにあたり、HFAのプログラムを参考にしたいと思い、来日中のお3人を招きました。

この講演会では、里親以外に、児童相談所のワーカーや、家庭訪問員として民間から派遣されて実践している方も参加しました。

2007年4月から、厚生労働省は、「こんにちは赤ちゃん事業」を始めました。これは虐待に陥る可能性の高い生後4ヶ月までの新生児・乳児のいるすべての家庭を訪問する事業です。増え続ける子ども虐待防止の事業の一つです。事件となった明るみに出た新生児・乳児への虐待死の比率は高く、早期介入が予防につながるということで始まりました。厚生労働省虐待対策室の伊原室長にこの事業について尋ねたところ、今年5月の時点で、7割の自治体が手を挙げてこの事業を実施しているとのこと。事業が始まったことは、大変喜ばしいことです。

しかしながら、家庭訪問員への研修は統一されてはおらず、ガイドラインがあるのみとのことは危惧されることです。今後、「こんにちは赤ちゃん事業」が地域によって質の差が出て、質の向上が求められていくときにHFAの取り組みは参考になるかと思えます。以下概要を述べます。

HFA のプログラムの特徴は 12 重大原則を土台としている点にあります。チェックリストに基づいたふりわけの作業とアセスメントを行い、2 つの段階を踏んで家庭訪問が必要な家庭を見極めて訪問します。訪問の際に重要なことは、”strength” 視点という、家族の「強み」に焦点をあてたアプローチをすることです。シドニーさんは講演の中で次のように語りました。

「行動に問題がある人には医療的アプローチのように薬を処方するようなやり方、何か悪いことがあったら治さなくてはいけない、というようなものは効果がありません。それは今までの経験から実証されています。長所や強みに焦点を当てた介入方法の根底にある哲学は、それぞれの家庭には必ずいいところがある。一つひとつの家庭に入ってそれを学ぶ、という介入の方法です」

そのために、何が問題なのかに焦点をあてるのではなく、親の欲求やニーズに焦点をあてることで、信頼関係が築かれプログラムが有効に活かされます。そのため、家庭訪問員と親との関係も、旧来の福祉サービスを提供する側は専門家という位置ではなく、親と家庭訪問員がパートナーシップを結ぶことを重要視しています。このように、常に家庭のニーズに焦点をあてたサービスなのです。それを崩さず、揺るぎないものにするために 12 の重大原則があるのです。

家庭訪問員の選び方もサービスを受ける家族の視点が活かされています。「これまでのいろんな研究から、学位や職業的背景よりも、その人がいい人間関係、信頼できる人間関係を作れる要素を持っていること、その人の特性に焦点をあてるのがとても大切だということがわかりました。訪問される家族は、この人はどんなことを知っているのか、どういう学位があるかというよりも、本当に私のことをサポートしてくれるのか、本当に私のことを世話してくれるのか、ケアしてくれるのか、ということのほうが大切なのです」とケートさん。

また、サービスは強制せず、親の自由意志で受けるため、親は嫌になったらいつでも支援を断ることができる点も大きな特徴です。「プログラム自体を興味のあるプログラムにして、家族が首を長くして訪問を待っているような訪問にしないと続きません」とケートさん。訪問サービスが押しつけられるものでなく、常に家族から快く受け入れられるようなサービスでなければ意味がないということです。家庭訪問員はどれだけ親の悩みに耳を傾けて共感し受けとめ、必要な情報を提供し、訪問し続けられるか、親の真の受けとめ手としての力量がいつも試されているのです。

この講演会の次の日、シドニー・ウェッセルさんと、ケート・ウィタカーさん、ヘネシー澄子さんは、HFA の取り組みを「こんにちは赤ちゃん事業」の参考にしてほしいと、厚生労働省を訪問しました。同行した、アン基金プロジェクトの事務局長、坂本和子さんは次のように話しました。

「会議が始まる前に家庭福祉課・藤井康弘課長が国会の合間に挨拶に見えました。その後、職員の方々に向けて、HFA のプログラムについて説明しました。会議の終わりごろに、虐待防止対策室伊原室長が参加されて、ヘネシー先生たちと意見を交わしました。是非、自治体で始まっている『こんにちは赤ちゃん事業』に活かしてほしいものです」

その後、シドニー・ウェッセルさんと、ケート・ウィタカーさん、ヘネシー澄子さんは、高崎、愛知、大阪などで講演してアメリカに帰国しました。

HFA の取り組みを国の新生児訪問事業に役立ててほしいという思いから、HFA プログラムの内容を詳しくお知らせするために、全 27 ページに及ぶ講演録を紹介致します。

もくじ

1. シドニー・ウェッセルさんの講演・・・・・・・・・・P 1
2. ケート・ウィタカーさんの講演・・・・・・・・・・P 10
3. 質疑応答・・・・・・・・・・P 22

ヘネシー：みなさん、こんにちは。今日はアメリカからお2人のお客様をお招きしました。

厚生労働省が「こんにちは赤ちゃん事業」を始めましたね。始めたのはいいことですが、訪問の内容など、質が問われると思います。今日は、アメリカで新生児の訪問事業をしている「健康な家族アメリカ」(HFA)のスタッフのシドニー・ウェッセルさんと、ケート・ウィタカーさんにお話していただきます。シドニーさんは、HFAの質の確認と認定課課長さんで、ケート・ウィタカーさんは、HFAの西部地区支部長です。

今度、アン基金プロジェクトではベテラン里親さんが、新しく里親さんになった人などに訪問する事業を始めることになりました。HFAは、家族の強みに焦点をあてたもので、上手に家族と人間関係を築きながら教えていくという家庭訪問の仕方です。それは、里親訪問事業でも同じように必要なことです。これからシドニーさんとケートさんにHFAの取り組みについてお話していただきます。新生児対象のものなので、応用できないものもありますが、応用できるものもあります。それを生かして良い家庭訪問をしてほしいです。

○シドニー・ウェッセルさんの講演

シドニー：今日は、私たちを呼んでくださり、ありがとうございます。
来たばかりなのにもうこの国に愛着を感じています。
わからない点があったらいつでも手をあげて質問して下さい。
まず最初に、講演議題について紹介します。

講演議題

- ・なぜ家庭訪問するのか
- ・12 重大原則と認可過程を打ち出すまでの歴史
- ・12 重大原則の目的
- ・12 重大原則について

今日はこれらについてお話しします。では話を始めます。

なぜ家庭訪問するのか？

- ・赤ちゃんは子育ての手引きや使用書を持って生まれてこないから
- ・親しく親となった人たちは何らかの助け—情報、コネ、支援など—を必要としているから
- ・早い時期における投資（支援など）は未来の社会で還元できるから
- ・今1ドル予防に使えば後で4ドル使わなくてもすむといわれているから

シドニー：赤ちゃんが生まれるとき、赤ちゃんはお父さんやお母さんに、こうやって育てて下さいとマニュアルを持って生まれてくるわけではありません。赤ちゃんが生まれると、何人人生んでも子育てについて疑問が浮かぶので、サポートに対して親は門戸を開きやすいときです。



里親さんが里子を預かったばかりの家に訪問することは、タイミングがいいと思います。いろんな研究で、早ければ早いほど、早期に介入するほど問題を予防できて、とてもいい結果になることが実証されています。

ヘネシー：日本でも、“転ばぬ先の杖”ということわざがありますね。今、1ドル使って早期に介入すると、後で4ドル使わなくて済みます。子どもが乳児院や児童養護施設に行くと多額のお金がかかります。そうならないよう、親と子どもが愛着関係を築くことができれば、1ドルだけで4ドルは使わなくてすむのです。

なぜ家庭訪問が効果的なのか

- ・ 家族の環境で行うから
- ・ 親が（家庭だと）コントロール（抑制）できる地位にいるから
- ・ 孤立している親たちに接触できるから
- ・ 家族を地域のサービス資源に連結できるから

シドニー：家族の本当の悩みを知るためには、オフィスに来てもらって話を聞くよりも、家庭訪問して観察するほうが、よりいい観察ができて介入もできます。なぜなら、家族も自分の家にいることで、とても安心するからです。自分のテリトリーにいるので、訪問する側がお客様さんで、家族が自信を持って私たちと話ができます。

「健康な家族アメリカ」で、焦点をあてているのは、孤立している家族です。自分たちで情報を集める家族は心配りませんが、非常に孤立している家族を見つけるには、家庭訪問をしないと見つけ出せません。大変孤立した家族は、地域にある資源を全然知りません。家庭訪問員と家族がいい人間関係を作れると、とても信頼してくれて、この家族に必要な地域の資源とつなげてあげることができます。

家庭内暴力を受けたときのカウンセリングなど、橋渡しをすることができます。橋渡しといっても、ただ言葉だけで紹介するのではなく、自分の車で必要な場所に家族を連れて行って、カウンセラーに代弁して、つながりやすいようにサポートします。

なぜ乳幼児期がそんなに重要なのか

- ・ 子どもが最も速やかに重要な発育を遂げるのは出生から5歳までである
- ・ この時期に考える、学ぶ、他の人に共感（同情）するなどの能力が発達する
- ・ 学習上の問題（不登校、少年犯罪、読み書きができないなど）は揺りかごから始まる

シドニー：HFA アメリカが提案している家庭訪問は、0歳から5歳までです。なぜかという、その時期は赤ちゃんの脳や身体が一番発達する時期だからです。

ヘネシー：みなさんとよく大脳辺縁系の話をしますよね。感じる脳である大脳辺縁系が発達するのは0歳から6歳までです。そのため大事な時期なのでとても丁寧に5歳まで訪問します。今まで、子どもの将来の成功というのは、持って生まれた遺伝か、環境だけだと随分といわれてきました。今わかってきたことは、遺伝も大切ですが、遺伝子のいいところを同調してくれる、いい家庭の環境がとても大切です。それがないと、人生に成功するような大人に成長するのは難しいです。子どもがまだお腹にいるときにケアを受けて、生まれた途端に愛着をつけるやり方で、養育、愛育することで、子どもの可能性を伸ばすことができます。

シドニー：子どもにどういうものを食べさせて、どういうものを飲ませて、というような身体のケアばかりでなくて、どのように子どもと関わるか、どのように子どもに話しかけるか、どのように子どもを抱くか、というような相関関係が子どもにはとても大切です。愛育を受けなかった子どもたちがどのように育ってしまうかということ、たくさん子どもたちは学習ができなくて不登校になったり、読み書きができないという問題が起きてしまいます。青少年犯罪につながり、大人の犯罪につながる、というような悪い影響が出てきてしまうのです。

家庭訪問で、お父さんやお母さんに、「あなたがたが今やることは、これほどの素晴らしい結果を生みます。子どもの頭が良くなり、勉強ができるようになります。お母さんやお父さんと相関関係を作ることとはとても大切です」と伝えると、非常にエンパワーされます。親は非常に力をもらい希望をもらって子育てにもっと意欲が出てきます。

虐待の結果

シドニー：(脳の断層写真を示しながら) これは、2人の3歳の子どものMRIの断層写真です。左側は、正常な3歳の子どもです。大人と話しているとき、前頭葉がピカピカ光っているし、視覚や聴覚に血液が通っていて、きちんと大人と対話できています。右側は、非常にネグレクトされた子どもです。虐待やネグレクトされた子どもたちは、緊張ホルモン(コルチゾール)がものすごく高いです。緊張ホルモンが高いと、脳神経回路、シナプスをなかなか作られない。シナプスが作られないと脳が未発達になってしまう。この丸いところが共感する能力をつかさどるところで、そこが全然、シナプスができていないため、そこに血液も流れません。この写真で、今までずっと、遺伝だ、環境だと討論されてきましたが、環境だということがはっきりと証明されました。遺伝としては、脳神経がいっぱいあった状態で生まれてきましたが、そこから回路が作られないのは環境の問題です。そのことははっきりと結論が出ました。

12 重大原則と認定の歴史

- HFA のネットワークの現場が最初に手がけ、現場の情報と導きによって出来上がったもの
- 原則はみなリサーチで実証されたことばかり
- 地域の事情に合わせられる柔軟性がある
- 最高度の質の(家庭訪問事業の)実践が確保できる
- 1996 年に(12 重大原則に基づいた)認定過程が試みられた
- 1997 年に認定の実施開始

シドニー：この HFA の運動を一番最初に州として始めたのはハワイ州です。ハワイの「健康な出発のプログラム」が最初に作られました。ハワイは 1980 年代に虐待とネグレクトが増大して、州全体で何かしないといけないということで、新生児訪問が始まりました。

家庭訪問のプログラム自体は、新しいプログラムではありませんでした。しかし、ハワイで始めたのは大変組織的に行われました。産院でまずお母さんたちに、家庭訪問が必要な家庭のふりわけのためのインタビューをしました。それぐらい組織的に行ったことは新しいやり方でした。その結果はとても良かったです。虐待やネグレクトが減って新聞などでも紹介されました。

そのため、アメリカの本土の人たちが大変興味を持ちました。それで、福祉関係者がハワイに見学に来ました。その人たちが研究大会でハワイで行われている新生児家庭訪問プログラムを発表しました。その中で、このプログラムがいいのは、20 ぐらいの要素があるからだと言ってくれました。

ヘネシー：みなさんがご存知のマクドナルドの親会社に財団があって、その財団が子どものことにお金を使うことを望んで、虐待やネグレクトを防ぐためのプログラムを本土にも作りたいという要望がありました。そしてその財団がシカゴに本部がある、日本の CAP と同じ子ども虐待防止プログラムで、プリベンション・チャイルド・アメリカというオーガニゼーションに、お金を出すからこういうプログラムを広めましょうと言ってくれました。そして、ハワイでやっている新生児家庭訪問プログラム「健康な出発プログラム」のスタッフとロナルド・マクドナルドの財団のお金と CAP の人たちが一緒になって、「健康な家族アメリカ」という運動を始めました。

「健康な出発」と、「健康な家族アメリカのプログラム」は同じものです。ハワイでスタートしたプログラムは、健康な出発と呼ばれていて、オレゴンはそれを真似したから、「健康な出発」と呼ばれていますが、すべてが健康な家族運動の中の 1 プログラムとして考えて下さい。

シドニー：この HFA の運動が始まったのは、1991 年ですが、1993 年までの間に、20 ぐらいのプログラムがまず始まって、すごい勢いで新生児訪問プログラムが増えました。そのため、新生児訪問プログラムを質の高い内容に一貫しようと、もう少しきちんとした原則を打ち立てなくてはならない、ということになりました。

シカゴにある HFA の本部は実際に家庭訪問をするところではありません。家庭訪問をする人たちからいろんな情報や研究成果を集めて分析をする役割をします。HFA がこうしろあしろと指示するのではなく、草の根から生まれてくる素晴らしいプログラムが、HFA をひっぱっています。それがこのプログラムの大きな成功になっています。

HFA の 12 重大原則はすべてリサーチして実証されたものばかりです。それもととても大切なことです。12 重大原則といっても、アメリカはとても多様な国なので、地域に合わせた柔軟のあるプログラムが求められます。地域の中でいかに生かしていくかが大切です。最初に始めたときは、12 重大原則がきちんと守られていましたが、だんだんと崩れていってしまう。これはしなくていいわよね、これはいいわよねと、質が落ちてしまうことも大きな問題になっていきました。

12 重大原則には、どういうふう to これを実践しなさいというようなサジェスションがないんです。そのため基準が必要だということで、1996 年に、最高の実践ということで基準を作りました。それをもとにして、認可制度を作りました。1996 年に 1 年間、試験的にやってみて 1997 年にそれが完全に実践されました。認可制度が実践されて今年で 10 年目になります。

今日の HFA の指導の及んでいる場所

- ・アメリカ 34 州、ワシントン DC とカナダで 420 プログラムが HFA の指導を受けている。
- ・アジアではフィリピン
- ・ヨーロッパ、南アフリカ、ベリーツなどが(HFA の活動に)興味を示している
- ・(プログラムの) 質の確認、資金調達、広報、テクニカルアシスタンス、トレーニングなどができる 450 人以上のリーダーがいる
- ・認定されたプログラムが現在 305 あり、200 のプログラムが認定を受ける過程にある

シドニー：現在、アメリカとカナダで HFA が指導しているプログラムは 420 あります。

アメリカの 34 州と、首都のワシントン DC とカナダで、420 のプログラムがあります。フィリピンはまだプログラムになっていませんが、いろいろな情報を流していて非常に大きな影響を与えています。

ベリーツや、南アフリカとか、ヨーロッパからは、いろいろな情報を送ってほしいと要望があり、興味を示しています。

質の確保や資金調達、PR の方法、テクニカルアシスタントなどができるリーダーが 450 人以上います。これらの人たちは、HFA の本部で働いているわけではなくて、各支部にいる人たちが HFA からトレーニングを受けてリーダーになっています。

420 のプログラムの内、305 が認定されています。200 ぐらいが認可される過程に入っています。

質問者 : 420 とか 305 のプログラムというのは、何を指しているのですか？

ヘネシー : 新生児訪問のプログラムです。
ハワイの健康な出発プログラムとか、オレゴンの健康な出発プログラムとか、今、長野県池田町が新生児訪問を始めましたよね。

質問者 : 地域で工夫している新生児訪問プログラムをシドニーさんたちが見て、それがかなってれば認可されるという・・・



ヘネシー : まずはプログラムを登録して、450 人が精査して、こうしたらいいとかアドバイスして、認可されるように質を高めます。そして質の高いプログラムになると、最終的には認可されます。

質問者 : その認可されたプログラムは、アリゾナ州で認可されたプログラムと、ハワイ州で認可されたプログラムとでは違いがあるのですか？

シドニー : ハワイやオレゴンは、資金の問題があって、第 1 子だけ行うとか、どのように行うかは、12 重大原則に基づいていますが、対象人口を狭めるなど違いがあります。誰が訪問するにも違いがある。アリゾナ州ではその地区に生まれたすべての赤ちゃんが対象です。そのように各地域で柔軟性を持ってどのようにオーガナイズするか決めます。

ヘネシー : 日本でもすべての赤ちゃん対象という枠組みができたのですから、その枠を使って誰が訪問して、どれくらいの期間を行うのか、どれくらい頻繁にするか、考えなくてははいけません。そのときに、12 重大原則が基本になります。

質問者 : その 12 重大原則の柔軟性といいましたが、それがあって、その地区では赤ちゃん全員に行くかも知れないし、別の州では全員には行かないかもしれません。けれども共通する部分では、おさえおかなくてはいけないものがあって、州や地域で違いがあるものを 1 つ、2 つと数えて 420 とか 305 という数が出てくるのですね。ハワイ州で行っているプログラムを HFA が認定したら、それが 1 つのプログラムが認定されたということですね。

ヘネシー : 州や地域によって異なってアリゾナやオレゴンは州が HFA プログラムを行っています。そうすると、1 つのプログラムとして認可されます。そのため、そのプログラムは一貫してはなりません。昨年、来日した、オレゴンの HFA のカーレンさんのプログラムが認可されていないのは、すべてのプログラムが右に習っていないため、認可されていないのです。そのことに困っていると話していました。

一方、アリゾナは州全体のプログラムとしてちゃんと認可されています。他のところはいくつかのプログラム、たとえば教会や、市がやっていたりで、それはマルチサイトと言って、州全体ではなくて1つ1つのプログラムが認可されています。

たとえば、オレゴンのカーレンさんのプログラムは、カーレンさんのオフィス自体が傘の下になっっていて、傘の下にある1つ1つのプログラムを支援しています。

ケートさんが行っているアリゾナプログラムはすべて傘下にあつて、全部のプログラムをしょっちゅう回っている。他の州では、この1つのプログラム、あのプログラムと別々かも知れません。

オレゴンやアリゾナは傘の部分が指導、トレーニング、査定、認可とシカゴの本部から依頼をされて行っていて、一番理想的です。

日本のプログラムも池田町が一番最初に認可されたいと言っていますが、それは池田町だけのプログラムです。厚生労働省がこのHFAのプログラムを取り入れれば、すべてのプログラムが認可されるような質の高いプログラムになります。日本にもアンブレラオーガニゼーションが必要かもしれませんね。

シドニー：認可されるには、そのプログラムが2年間行われていなくてはなりません。最高の質の基準を満たすやり方で行っていることが大切です。また、1つ1つのプログラムが規則を作らなくてははいけません。規則をどのように守って行っていくかという過程を作る。その中で、その核となるものをHFAが与えて、その地域にあったやり方で行うのはいいことになっています。HFAのプログラムがたくさん実践されているのは、東海岸のほうです。その一方で、西海岸はやっていないところはかなりあります。

質の確認と確保

- ・HFAは、プログラム内部で先ず自己評価を行い、新生児家庭訪問の最高の実践を確保するため12重大原則をプログラムに組み入れる努力をするように指導する
- ・研修と共に認可によってプログラムの質が確保されるので、HFAが質の高いプログラムであることを認められている

シドニー：認可されたいと思ったプログラムは、自分たちで自己評価しなくてはなりません。自分たちのやり方は、12重大原則に沿っているか、基準にどれくらい沿っているか。必要なら変更して、自分たちで質を高めることがまず大事です。

HFAからテクニカルアシスタントとしていろんなサポートがきます。チャレンジするのが難しいとか、いろんな提案をして、できるだけプログラムが12重大原則に沿うように、認可されるように助けます。HFAはトレードマークというか、ブランドになっています。そのため、HFAから認可されると、質の高いプログラムと評価されます。

長所や強みに焦点をあてた介入方法

- ～で変化（成長）の動機付けをする
- ・その家族の価値観・何が大切かを先ず知ること
- ・親の知識や技術を増進すること
- ・問題を正直に、でも思いやりを持って話すこと
- ・（親の）批判的思考のやり方を伸ばしてあげること

シドニー：HFA の考え方や哲学、介入方法は、長所や強みに焦点をあてています。ないところに焦点をあてたやり方や、医療関係のメディカルアプローチ、診断して治療するというアプローチとは正反対です。

行動的に何か問題があった人に、医療的なアプローチをしても、なかなか成功しないことが今までの経験から実証されています。何か悪いことがあったら、直さなくてはいけない、というようなものです。行動に問題があるときは医療的アプローチのように薬を処方するようなやり方では効果がありません。

長所や強みに焦点を当てた介入方法の根底にある哲学は、1つひとつの家族には、必ずいいところがある、ということです。1つひとつの家族に入ってそれを学びましょう、というものです。そのような強みに焦点をあてて介入します。

家庭訪問する人が、最初に入ったときに、部屋が汚いとかそういうところを見るのではなく、この家庭は何が一番大切にしているのか、その家族の価値観を知りたい、という形で入っていきます。

あなたにとって、何が一番大切ですか？と尋ねると、今まで、自分が裁かれると思っていた人たちは、これが一番大切だと言えるし、もっとその人と人間関係を作りたいという動機づけになります。親が知識や技術を持っていることを前提に関わっていきます。そしてその知識に積み重ねをしていくのです。私は、家庭訪問員るとき、自分を家族のチアリーダーとして見ていました。

こういう話をすると、いいところばかりしか見ないで、悪いところは指摘せず、表面的な訪問しかしていないととられるけれど、そうではありません。信頼関係ができると、お父さんやお母さんから、こういうことは問題だと言ってくれるし、家庭訪問員がもしもこれが本当に問題だと思ったら、お父さんやお母さんにこれが問題と思うと正直に伝えられます。そしてどのようにしたら解決できるか、一緒に考えましょうといい、一緒に問題解決ができるようになります。

一緒に問題解決をしていくことができるようになると、親は問題を理論的に考えて、どのように問題解決の戦略を立てたらいいか、わかってきます。そのため、親は緊急な事態が起きても理論的に考えて解決できるような方法を学びます。

最初は自信がなくて、地域の資源は全く知らないお父さんやお母さんが、問題解決することで、自信がついて、自分たちでもっとやろうという気持ちになります。そして、自分たちで地域の資源を見つけるようになり、成長していきます。

強みを基盤とする 対 弱みを基盤とする (方法)

- ・パートナーシップを結ぶ
- ・訪問員 (職員) が「専門家」
- ・親の欲求・ニーズに焦点を置く
- ・何が問題かに焦点を置く

シドニー：強みを基盤にするアプローチと、弱みを基盤にするアプローチを対比してみました。左側は強みを基盤とするアプローチで、右側は弱みを基盤とするアプローチです。まず人間関係は、左側は親と訪問者がパートナーシップを結びます。右側は、訪問者が専門家だから、私の言うことを聞きなさい、というふうに家族と関わります。

どういうことに焦点を置くかということ、左は、親のニーズに焦点をあてています。親が知りたいことや困っていることから入っていきます。一方、弱みを基盤とする右は、これがいけないとか訪問者が専門家として問題を指摘して、問題を解決してしまう。そのため、親が自分で解決しないため、全然学べません。

社会福祉ではよく次のように言います。「魚を毎日与えるのではなく、魚の釣り方を教えなさい」と。魚の釣り方を学べば、自分で魚を釣って食べていけます。このように、家庭訪問した家庭と家庭訪問員は、強みを基盤とするアプローチで、一緒に学んでいきます。

(続)強みを基盤とする 対 弱みを基盤とする (方法)

- ・訪問員 (職員) は親の能力の上に積み重ねを行う
- ・訪問員 (職員) が問題の原因を見つけ出す
- ・訪問員 (職員) は家族が自分の目標に到達するのを支援する
- ・両親は問題をどのように「直さねばならない」か、お説教される

シドニー：スーパーバイザーのケートさんたちは、強みをアプローチする方法を家庭訪問員に教えます。親の能力を積み重ねる、というやり方を。研修で考えてみんなと検討しながら行います。親のしているいいところ見つけてあげると、親はもう少しそれをやろうと頑張ります。HFA では、家族を訪問したときに、家族の目標を立てます。家族から出た目標の設定です。それをいつも目標だったわね、と確認しながら支援します。

弱みに焦点をあてたものは、これをしてはだめ、あれをしてはだめと職員が指摘して、お説教をします。だから嫌がられるのです。強みに焦点をあてるというのは、重大原則に数えられていませんが、12 重大原則のすべてが、強みに焦点をあてたものです。

12 の欠くことが出来ない重大原則 (要素)

- 大きく3つの部分にわけられる
 - ・家族に対するサービスの開始期
 - ・家庭訪問の内容
 - ・良い実践を保つための管理・運営機構

シドニー：この 12 の重大原則は、大きく 3 つに分けられます。これから一つひとつ見ていきます。まず最初は、家庭に対するサービスの開始期があります。それから、家庭訪問の内容です。3 つ目は、いい実践を保つための管理・運営機構があります。ここからは、ケートさんに 12 の重大原則について詳しく話してもらいます。

○ケート・ウィタカーさんの講演

サービスの開始期

- 重大原則第一
- サービスを周産期か出産直後から開始すること
 - ・両親が変化を最も受け入れやすい時期だから
 - ・両親が赤ちゃんの発育を助長する新しい研究や知識に興味を持つ時期だから

ケート：これから 12 重大原則の内容を話していきます。みなさんに話すときに、重大原則がどのように、柔軟性があるかが伝わるようにお話しします。そして、この重大原則がどのように実践されているか、実践の基準を話してそれに肉付けしていきます。最初の重大原則の第一は、できるだけ早くにサービスを開始することです。

そしてどのようなプロセスで家族がこのプログラムを受けられるかです。一番大切なことは早めに家族とつながることです。母親が周産期か、出産直後からこのサービスに登録することが第一の要素です。

今、脳の研究では、お母さんのお腹の中で、受精して受精卵が分割して、4 日目に脳ができてくることがわかっています。そのため、早くから介入する必要があります。お母さんが妊娠していると気づいたり、出産直後は、自分が育てられたように、子どもを育てようと思うよりも、何か新しいことをやってみようとか、新しいものに対して目が向いて、人からの支援の提供を受け入れやすい時期です。

最新の脳の研究について、お父さんやお母さんたちに話すと、非常に興味を持ってくれます。そのため、いろいろな調査結果を覚えておいて、それを家庭訪問時に使います。

HFA のオフィスは、産院、助産婦、病院などと、固い連携をとっています。HFA のプログラムを受けるほとんどの家族は、赤ちゃんが生まれて 3 ヶ月にならない前にすでに登録されています。

私の娘が 13 歳の思春期のとき大変だった。こういう家庭訪問をしてほしかったです (笑)。



サービスの開始期

- 重大原則第二
- 家庭訪問サービスが最もためになる家族を見つけるために組織的な方法を使うこと
 - ・妊娠中または新しく親になった全部の人たちに（サービスに）参加できる機会を保証するため

ケート：家族がこの訪問サービスによって立ち直る、この家族がこのサービスを使ったらよくなる、そういう家族を探すためには組織的な方法が大切です。

組織的なアプローチによって、この家族にサービスを提供しましょうということになります。全部の家族だとお金が足りなくなるので、HFA では、この家族へのサービスというように対象人口を決めていいことになっています。

一番大切なのは、すべての赤ちゃんとお父さん、お母さんになんらかの支援があることです。その中で、集中して訪問する家族を少しずつ限定します。その際、組織的な方法が必要になります。最初は全部の家族がサービスを受けます。一回目の訪問だけかもしれないけど行います。

家族アセスメントの過程

- (家族の持っている) 強みとニーズを組織的に発見する過程
- 3つの作業
 - ・どの家族が支援と教育の特典の対象となるか決めること
 - ・新しく親になった人たち全部に情報と地域の資源を提供すること
 - ・健康な家族プログラムに照会すること

ケート：組織的なアプローチは、2段階に分かれています。ほとんどのプログラムでは、まず最初に産院で赤ちゃんが生まれたとき、ソーシャルワーカーなどが家庭訪問が必要な家庭かを見分けるためにふるいわけの道具を使って、お母さんと話をします。そして、3つの作業の中の1つを行います。

最初の訪問では産院での訪問になります。この母親にはどんな支援が必要か見つけて見分けます。

もしも、その家族が地域にある資源が必要、または資源を使える家族であれば、どのような資源をどのように与えたらいいかを調べます。

そして、最後のところで、その家族が頻繁な支援が必要であれば、「健康な家族プログラム」を照会します。HFA の家庭訪問員がアセスメントした場合は、あなたのところには、これから毎週支援に行きます、と伝えます。すべての家族が毎週支援を受けているわけではなく、必要な家族だけ家庭訪問サービスを受けます。

この過程は大體二段階に分けて行われる

- 振り分けの過程で最も詳細にわたるアセスメントが必要な家族を選別する
- (選別された家族にだけ) 家族ストレスチェックを行い、リスト表を完了する

ケート：最初の訪問のときに、ふるいわけ、スクリーニングをします。そして、第2段階では、その家族がもう少し頻繁な訪問が必要であれば、もっと詳細なアセスメントをします。このふるいわけの際に行う質問は一般的なもので、赤ちゃんが周産期のときに、どれくらいお医者さんに通ったか、家族の経済状態、保険があるか、家族に支援があるのか、どれくらい孤立しているか、一般的なことを見るふるいわけです。

そのときに、ちゃんと支援がたくさんあって、この家族は特に私たちの支援が必要でないと判断したら、お母さんたちの集まりや母乳ための教室があるなど、一般的な情報を与えます。この地域にはどのような資源があるかという情報を与えるだけです。しかし、もしも経済的に貧困であったり、DVがあるなど、問題のある家族だった場合には頻繁な訪問が始まります。

HFAは、コロラドの医師で最初に被虐待児症候群(battered child syndrome)という言葉を発表した、小児科医の故ヘンリー・ケンプ医師が始めた家庭訪問のやり方です。ハワイとケンプ医師とは関わりがあって、ケンプ医師が開発したものをいろいろ使っています。ケンプ医師が作ったものに、ストレスチェックリストがあります。HFAのほとんどのプログラムでは、第2段階のストレスチェックリストに、ケンプ医師のものを使っています。ケンプ医師のストレスチェックには、10項目があり、悪いところばかり探すのではなくいいところも引き出します。

家族ストレスチェックで検討する10項目

- (親の)子ども時代の成育歴
- 生活様式(薬物乱用、精神保健、犯罪歴など)
- 児童福祉サービスに、以前関わりを持った経験について
- (親、特に母親の)孤立度、生活諸問題に対処する技術
- Stresses ストレス(の種類と度合い)

ケート：第2段階の家族ストレスチェック10項目の最初の事項では、親の成育歴について尋ねます。あなたは子ども時代に虐待されましたか、というような質問ではしません。あなたが子どものときに、一番かわいがってくれた人は誰ですか?とか、もしも悪いことをしたときには、どのようなことがされましたか、ということを探ねながら、親の生育について調べます。

次に生活様式について尋ねます。あなたは麻薬をしていましたか?とストレートに聴くのではなく、あなたは学生時代にパーティをしたときにどんなことをしましたか?どういうものを飲みましたか?と聴きます。もしかしたら、麻薬をやっていたと、話すかもしれません。うつ状態になって薬を飲んだことがありますか?ということなどを聴きながら、生

活様式について尋ねます。

さらに、児童福祉に関わるような経験があったか、具体的には児童養護施設で育ったか、里親家庭で育ったか、里親だったかを聴きます。

次に、お母さんが赤ちゃんを連れて自宅に帰ったときは、子育ては誰が手伝ってくれるのか尋ねます。誰もいないとすると孤立していることがわかります。もしも問題があったときに、どのように問題に対処しているか、生活のいろいろな問題に対してどう対応しているか、これをコーピングスキルと言いますが、そうした対処する技術があるか見分けます。さらに、ストレスの種類と度合いのチェックをしたり、居住状態、アパートに住んでいるのか、親と同居しているのか、経済的な問題、人間関係などを聴きます。

(続) 10 項目

- 怒りの管理方法
- 子どもの発育（段階）に対する期待
- しつけの方法
- 新生児に対する認識
- 愛着の絆の形成度

ケート：10 項目目の 6 つ目は、自分の怒りの管理方法です。他の人に腹が立ったとき、どういう対応をしますか？自分の配偶者に腹が立ったときにはどういう対応をしますか？と尋ねます。

また、子どもの発育段階に関する期待、オムツが取れる段階、歩き出す段階などについても尋ねます。お母さんに聞くと、4 ヶ月ぐらいでオムツが取れると思っている人もいます。それにより、この人は育児について何も知らないということがわかります。

また、赤ちゃんにしつけを始めるのであれば、いつごろからどういうしつけを始めてお母さんだけでやるのか、お父さんといっしょにやるのか聴きます。この赤ちゃんに対して、どういう考えを持っているのか、生まれた子どもが第 3 子、第 4 子だったらこの子は他の子とは違うと思っているかもしれません。そのため、この子をどう見ているのか聴きます。

愛着の絆に対して、お母さんたちがどのような使命感を持っているのか、赤ちゃんとどれくらい一緒にいて、愛着の絆をつけたいと真剣に思っているか、というようなことを聴きます。

家庭訪問員はこのような質問項目について、順番を追って聴くのではなくて、ストレスチェックについてすべて頭の中に入っていて、お母さんたちと一般的な話をしながら、上手に引き出します。

ヘネシー：そのロールプレイを健康な出発のプログラムをしている、オレゴン州の研修で見たときに本当にすごいと思いました。

質問者：家庭訪問員は母親に尋ねながらメモするのですか？

ヘネシー：全然しません。全部頭の中に入れて、訪問先の家を出たら、チェックリストが入っている自分の車にかけこみます。自分の車がオフィスだと言っていました。このストレスチェックだけのために、1週間の研修が必要です。

質問者：家庭訪問の対象は、お母さんだけですか？ お母さんに限らず、お父さんとか、家族全員にも行うのですか？

ケート：お母さんとお父さんは別々に質問します。お父さんがいない場合は、お母さんから聴きます。チェックリストの段階でお母さんから聴いたことをベースにして、その後の訪問のときに、いつもそこに戻って確認していきます。「この前、そう言っていましたね。そのためにはこうしましょうね」というようにつなげていきます。

ヘネシー：やっぱり技術なんですね。

ケート：チェックリストは点をつけます。この点以上となったら、頻繁な長期に渡るサービスが必要になる、と決められています。

質問者：家庭訪問して最初にチェックリストする方と、長くその家族とつながりを持たれる方は違う方ですか？

ケート：そこは、柔軟性が需要で、地域のプログラムごとで異なります。オレゴンのプログラムは、10年以上行っているため、家庭訪問員がトレーニングできているので、家庭訪問員が産院でふるいわけをして、訪問する必要がある家庭を決めます。そして、ふるいわけした人すべてにアセスメントをします。それは家庭訪問員が行っています。最初の聞き取りでは、この10項目のチェックリストを使っていました。他のところでは、アセスメントする人は別において、訪問する必要がある家族へは、別の家庭訪問員が家庭に頻繁に訪れるところもあります。リストどおりにやっていたら大丈夫です。

家庭訪問の内容

- 重大原則第三
- サービスは（強制でなく）親の自由意志で行うこと
 - ・家族はサービスに参加することを自分で選ぶことで、最も進歩をみせるから

ケート：家庭訪問の内容に入ります。重大原則の第3は、サービスを強制してはいけない、ということ。家庭訪問サービスは、親の自由意志で行います。なぜなら、親が自分で選ぶことが、一番進歩になるからです。

ふるいわけして、アセスメントしたときに、是非来てくださいと親が言っても、家庭訪問に行ったら誰もいなかった、ということがあります。そういうときは、忍耐強くいろんな形で3ヶ月、家族にアプローチします。そのアプローチの仕方、どのように家族に手を差し伸べ

るかを研修で学びます。

来てくださいと言って、訪問すると家にいない人は、人を信頼するのが難しい人たちです。自分の生い立ちに、人を信頼できないことがあって、信頼関係を作るのに 3 ヶ月努力します。家族に手紙を出して、次に行きますよ、家にいてください、というときに家族が思わずニコッと笑うようなものを送ります。たとえば、花の種やかわいいシールだったり、それを見たときに、お母さんがニコッと笑えるような物を手紙と一緒に送って、訪問を待っていてくださいねとアプローチします。

3 ヶ月絶え間ない努力をしても、訪問したときに家族がいなかったり、訪問を拒否した場合はそこで止めます。強制ではない、といいながらもできるだけこちらの訪問を受けてもらえるよう努力します。

家庭訪問の内容

- 重大原則第四
- サービスは頻繁に行うこと
 - ・毎週の家庭訪問
 - ・長期（3年）
 - ・4ヶ月の訪問で大きな効果があがる

ケート：重大原則の第 4 は、頻繁に訪問することです。そうしないといい結果がでません。ほとんど毎週訪問します。訪問の期間はできるだけ長いほうがいいです。アリゾナ州では 5 年訪問を続けています。

ヘネシー：日本の場合は 4 ヶ月の訪問とっていますね。

ケート：家族がだんだんと強くなって自信を持っていい方向に向かったら、毎週ではなく、隔週とか 1 ヶ月とか、3 ヶ月に 1 回とか、サービスをだんだん減らしていきます。

家族のニーズに従う、というのは楽しいことです。全部の家族を毎週訪問しなければいけないとプレッシャーになるけれど、家族のニーズによって、1 週間に 1 回、1 ヶ月に 1 回、2 ヶ月に 1 回とニーズに応えるのは楽しいです。いろんな研究結果から、4 ヶ月だけでも非常に効果があることがわかっています。

家庭訪問の内容

- 重大原則第五
- サービスは（家族の）文化に沿って行うこと
 - ・「文化」とは単に人種・民族だけでない
 - ・年齢(世代)、性別、地域社会を含む
 - ・家族の持つ価値概念に基づいて(サービス)を行う

ケート：先程シドニーが、家族の価値観を知るのはとても大切だと話しましたが、一つ一つの家族は家族の価値観をもっています。それは家族の文化です。家族の文化に沿ってサービス与えることがとても大切です。

アメリカの場合、文化に敏感で、多様な国なので、ヒューマンサービスやソーシャルサービスをすると、常に文化について頭に入れてやらないといいサービスができません。

文化というと、すぐに頭に浮かぶのは、人種、民族ですが、それだけではありません。世代、若いお母さんたち、年とったお母さんたち、それからお父さんとお母さんの意見の違い、女の赤ちゃん、男の赤ちゃんに対する見方、地域の社会性、田舎の家庭、都市部の家庭は違う。そのような広い意味での文化です。

家庭訪問員は、たくさんの時間を使って、何がこの家族の文化で、どんな価値観をもっているのか、とても大切にしているものとは何かをわかろうとします。

家庭訪問の内容

- 重大原則第六
- 両親と赤ちゃん両方を支援するサービスであること
 - ・赤ちゃん両親との愛着関係を深めるものであること
 - ・健全な発育を促進するものであること
 - ・(サービス)の目標を定め(目標ごとの)達成度を測ること

ケート：サービスの対象は、赤ちゃんに対するもの、お母さん、お父さんに対するもの、赤ちゃん両親の相関関係に対するものと、両親と赤ちゃんの両方にサービスを与えなくてはなりません。

ヘネシー：今の日本の場合は、赤ちゃんの体重がどれくらいか、赤ちゃんだけを見ているが、そうではないサービスが求められます。

ケート：プライマリゴールといい、第一の目標はお父さん、お母さん、特にお母さんと赤ちゃんとの間に愛着の絆ができて、それを深めることです。それがとても大切な目的です。訪問するとき、両親と赤ちゃんとの相関関係をよく観察して、いいことがあったら、両親をととても褒めることが大切です。赤ちゃんのシナプスがどんどん育っていきますねと言ったりしながら。そうすると、またもっとしようと思います。両親が赤ちゃんのニーズに敏感になって、敏感に答えようと思います。

ほとんどのプログラムは、児童の発達を促進する遊びなどの本があって、家庭訪問員がそれを両親にあげて、これをこう使って、赤ちゃんと一緒に遊んでください、そうするとこうなりますと伝えます。自分がやるのではなくて、両親に赤ちゃんとの相関関係をつけるやり方を教えます。児童発育のためのスクリーニングというリストがあります。3ヶ月スクリーニングとか、4ヶ月スクリーニングとか。それらを使って定期的に赤ちゃんの発育の状態を調べます。

この訪問で、やらなくてはけないことは、目標を定めることです。お父さんやお母さんたちが自分たちの目標と、赤ちゃんの目標の両方を定めます。そして、目標が達成されたら、一緒にお祝いをします。お祝いをするごとに、お父さんやお母さんたちは自信を得てもっと進歩しようとしています。

質問者：どのようなお祝いですか？

ケート：たとえば、目標達成すると、賞状を渡したり、金の星シールを貼ったりします。子どもみただけど、こういうお父さんや、お母さんたちは若いし、自分たちが育ったときに励まされたり、褒められたことがない人が多いので、そういうことがとても励みになります。お母さんたちが、「私がやったんだわ」と微笑むことをします。最初は外からの目に見えるご褒美ですが、そのうちに、これをやってよかったわ、と自分で自分に賞を与える、褒めることをすることができるようになります。それができたらしめたものです。

家庭訪問の内容 重大原則第六の続き

- 安全度の促進
 - ・危ないものを子どもが操作できないようにする、
水に対する安全度を高める、カーシートを使わせるなど
 - ・育児の規範を教える
- 予防的医療(保健)

ケート：安全度の促進も大切な要素です。アリゾナ州では特に、プールで遊んで子どもが溺れないように、赤ちゃんのときから泳ぎを教えたりします。カーシートを使わせたり。

ヘネシー：日本は母子手帳があるから、1ヶ月検診があるけれど、アメリカにはそういうものはありません。そのため、できるだけ定期健診を受けるために、小児科医に行かなくてはいけないのでそれを奨励します。

家庭訪問の内容

- 重大原則第七
- 家族を地域の資源につなげること
 - ・医療・保健の専門職
 - ・その他の存在する地域資源
 - ・社会的サポート（の輪を広げる）

ケート：家庭訪問の内容の重大原則第7は、地域のいろんな資源につなげるということです。というのは、アメリカの家族は核家族が多いし、今は母子家庭や父子家庭が多く、大都市に住

んでいても、他の人との交流がなくて、孤立している家族が多いです。

そのため、医療保険に対する資源、麻薬から立ち直るサービスにつなげます。家族に必要なと思った資源を見つけてつなげます。

ほとんどの「健康な家族のアメリカ」では、家族支援のためのサポートグループがたくさんあります。お母さんだけが集まるグループもあれば、お父さんだけが集まるグループもあります。精神保健のグループもあるし、たくさんのサポートグループがあります。

管理・運営機構

- 重大原則第八
- 家庭訪問員の担当件数は、担当する家族の持つ課題の重大性を考えに入れること
 - ・訪問の準備に充分時間を取れるように
 - ・担当家族の持つ独特なニーズや課題に充分な時間を費やせるように

ケート：重大原則の第8は、管理・運営機構にかかわることです。これは家庭訪問を担当する家庭訪問員の担当ケースを制限している、ということです。週に1回、家庭を訪問している家庭訪問員のケース数は、15件です。

一つ一つの家族が異なっていて、ユニークなので、家族を訪問する準備をします。そのために多くのケースを持ちすぎるとそれができなくなります。

ほとんどの訪問は1時間ですが、もっと必要な家族にはもっと時間を費やします。15ケースならば、時間をもっと費やすことができます。

家庭訪問員が技術を高めて、長い間、雇用関係にいてほしいと思っています。あんまりたくさんのケースを与えたら、すぐに辞めてしまいます。

管理・運営機構

- 重大原則第九
- 家庭訪問員の選択と雇用について
 - ・その人の持つ特性に焦点をあてること
 - ・乳幼児の発育に関する知識をもっていること
 - ・家族を対象とした仕事の経験があること

ケート：重大原則の第9は、どういう人を家庭訪問員として雇うかです。

これまでのいろんな研究から、学位や職業的背景よりも、その人がいい人間関係、信頼できる人間関係を作れる要素を持っていること、その人の特性に焦点をあてるのがとても大切だということがわかってきました。

訪問される家族は、訪問する人がどんなことを知っているのかとか、どういう学位があるかというよりも、本当に私のことをサポートしてくれるのかしら、本当に私のケアをしてくれるのかしら、ということのほうが大切なのです。

それにプラスして、もしも乳幼児の発育に関する知識を持っていたら素晴らしいです。けれども、それを持っていなくても、雇ってからたくさん研修するから、これはそれほど問題ではありません。

できれば、今までに職業で家族を対象とした仕事をしたことがあれば、それはプラスになります。ただそれが一番の問題ではありません。その人が、いい人間関係を作れるかどうかの問題です。家庭訪問員は、女性も男性もいます。

管理・運営機構

- 重大原則第十
- 家庭訪問員に質の高いトレーニングと支援を与えること
 - ・(担当する家族の持つ)長所・強みを基礎にして仕事をする枠組みを与えること
 - ・ 家庭訪問員としての役割を徹底的に集中的に訓練すること

ケート：家庭訪問員として雇われた人たちは、いろんなバックグラウンドを持っているため、一貫したトレーニングを与えます。家庭訪問員はどういうことをするのか、どういう使命を持っているか、集中したトレーニングをします。1週間、家庭訪問員としての役割について勉強します。

ヘネシー：昨年、日本から16名が、オレゴン州の「健康な出発のプログラム」の研修に参加しました。そのとき、ケートさんが午前中だけ少し研修をやりました。午後は家庭訪問する人たちに同行して見に行きました。

ケート：カギとなるトレーニングは、どのようにして、家族の強みを見つけるか、どうやって家族の能力を積み上げていくかです。

1週間のトレーニングの後に、家庭訪問員は核となるいろんな知識が必要になります。そのため、1年間から1年半の間にいろんなところでトレーニングを受けます。たとえば、DVに関するトレーニングや愛着に関するトレーニングなどです。麻薬についてのトレーニングもあります。いろんなコースがあちこちにあって、家庭訪問員はそれらを受けることが求められます。

管理・運営機構

- 重大原則第十一
- 思慮深いスーパービジョン
 - ・ 並行過程（子どもに対して親にやってほしい行動・態度を家庭支援員が親に対して行い、スーパーバイザーが家庭支援員に行う）
 - ・ 専門職としての「自分」の確立
 - ・(家族を援助していくための)技術を深める
 - ・ 責務

ケート：これがたぶん、このプログラムを提供することで一番大切なことだと思いますが、一人ひとりの家庭訪問員に思慮深いスーパービジョンを行います。1週間に必ず2時間、スーパーバイザーと1対1でどういうふうに訪問したか報告し、それに対して教えを受けます。

パラレルプロセス＝並行過程についてお話します。

スーパーバイザーの役割は、家庭訪問員の能力と技術に積み重ねをしていくことです。

たとえば、スーパーバイザーが家庭訪問員に両親にこうなさい、ああなさいといったら、家庭訪問員の技術を積み重ねるのではなく、家庭訪問員を迂回して、両親への助言となります。これではだめです。家庭訪問員はスーパーバイザーから教えを受けたら、両親の能力に積み重ねをしていくことが大切です。そして両親は赤ちゃんの能力に積み重ねをします。これを並行過程といい、この人が他の人にやってほしいことを、あなたがその人にやるというやり方です。



つまり、スーパーバイザー→家庭訪問員→両親→子ども。このような並行過程がとても大切です。スーパーバイザー→両親、家庭訪問員→子どもと、飛び越えてはいけません。たとえば、家庭訪問員が赤ちゃんに対して直接的に関わって遊んでしまうと、お母さんたちを迂回することになってお母さんの能力や技術を積み上げることにはなりません。そのためこのようなことはしません。家庭訪問員の役割は親の能力を積み重ねていくことです。

質問者：その大もとのスーパーバイザーはどこからくるのですか？

ケート：いろんな形でスーパーバイザーいます。スーパーバイザーは修士号をもっている人が多いです。修士号を持っているソーシャルワーカーとか、早期医療病児教育の修士号を持っている人などが多いです。その人たちが家庭訪問員として経験を積んで、スーパーバイザーになったり、それから経験を積んでプログラスマネージャーになった人もいます。

ヘネシー：お2人は、家庭訪問員から始まりました。シドニーさんはウィスコンシン州で、最初にこのプログラムが始まったときに、家庭訪問員として働いて、ケートさんはアリゾナ州でこのプログラムが始まったときに、家庭訪問員として働いたそうです。それでだんだんと経験を積んでいったのです。

ケート：家庭訪問員と家族がとても健康的ないい関係で、家庭訪問員が職業的な自己として自分を上手に使って、お父さんやお母さんに対処する。そうした家庭訪問員としてプロフェッショナルになることに、スーパーバイザーは力を入れます。

スーパーバイズは、家庭訪問員が家庭訪問時に何が起こったか、ということに焦点を置くのではなく、どのように家庭訪問をしたか、ということに焦点を置きます。やり方が職業的にいい家庭訪問だったか、そうでなかったら、もう少しこういう技術や知識を身につけてほしいというサジェスションをすることで、家庭訪問員の技術を高めます。そうすることで家庭訪問員の技術が高まります。スーパーバイザーがちゃんと見ていることで、家庭訪問員は職業的な責務、自分がちゃんと家族を支援しないと、スーパーバイザーの責任になると自覚を持つようになります。

このやりかたをしていると、お父さんやお母さんが家庭訪問員が訪問するのが待ちきれなくなります。今度来たら、あれを聴こう、これを聴こうと。同じように家庭訪問員は、スーパービジョンの時間が待ちきれません。今度は、こういうことを尋ねよう、こういうことがうまくいかなかったから、聴いてみようと思うからです。

ヘネシー：それも並行過程です。そして、家庭訪問がうまくいってお父さんとお母さんがとても成長したら、家庭訪問員とスーパーバイザーは一緒にお祝いをします。これも並行過程ですね。

管理・運営機構

- 重大原則第十二
- 管理機構
 - ・顧問委員会が存在すること
 - ・秘密保持を守ること
 - ・家庭訪問サービスの質の定期評価制度があること
 - ・児童虐待を報告する制度があること

ケート：最後の重大原則は、管理機構です。顧問委員会という、プログラム全体を見守ってくれる人たちによって構成されている委員会が必要です。

また、守秘義務があります。そして、家庭訪問をする前に、どういう訪問か家族にきちんと説明をして家族が同意してサインをするというインフォームド・コンセントをしなくてはなりません。

プログラム自体、または州自体に、定期的に評価する評価の過程の制度がきちんと整っていることが必要です。ただ行っているだけでなく、自分たちが打ちたてた目標に沿っているか、虐待や放置が減っているか、しっかりと評価する制度が必要です。

アメリカでは、すべてのプログラムにあります。子どもが虐待を受けたときに、どこに通報するか、通報のシステムをきちんとしていなくてはなりません。

質問者：訪問したときに、子どもにあざがあつて虐待が認められたり、疑われた場合は、その親に尋ねるのでしょうか、親に聞かずに報告するのでしょうか、どちらなのでしょう？

ケート：アメリカでは、虐待があった場合、絶対に報告しなくてはならない職種があつて

(professionals mandated to report abuse and neglect)、そういう人たちは、規則によって報告が義務付けられています。

ヘネシー：たとえば、私が虐待を通報しなかったら、社会福祉士のライセンスを取り上げられてしまいます。さらにすごい高額な罰金を払わなくてははいけません。そうした報告の義務をマンデイトリポートと言います。家庭訪問員すべてが、最初に家族と契約するときに私たちはマンデイトリポーターだから、虐待や放置が見つかったら、私が必ず報告しなくてははいけないのですと言います。

ケート：最初のときに契約するときに、もしもあなたやあなたの子どもに危険があった場合には私はマンデイトリポートをしなくてはならない、と言います。もちろん、あなたは赤ちゃんを健康に育てたいと思っているだろうから、たぶん、そういうことはないでしょうけれども、という風に話します。でも、もしもそういうことがあったら必ず報告します。

ヘネシー：それが一番つらいとオレゴンの家庭訪問員たちは言っていました。少数のケースだけあります、と言っていました。

○質疑応答

質問者：家庭訪問は何人で行かれるのですか？

シドニー：特別に家族に聴きたいことがあって、医療関係の問題がある場合、保健師さんが一緒に行くこともあります。メインは一人です。その意図は一人の人と長く信頼できる人間関係を築くためです。担当の家庭訪問員が辞めると、家族はもういいですと断ることがあるので、一人の家庭訪問員が継続して訪問できるよう、長く雇うことがとても大切です。



質問者：日本のこんにちは赤ちゃん事業だと、市町村が担当になるかと思いますが、HFAのスタッフは支部で雇用されるのですか？

ケート：そこは柔軟で、それぞれの地域によって異なります。たとえば、郡がやるときにそのプログラムを保健所でやってほしいとなると、その保健師さんは郡の公的な人です。それとは別に、オレゴンは私立のプログラムで、NPOだったカトリックチャリティーとか、イースターシールとか、長い間、チャリティーで関わっていたところが、私たちがやると言って、州と提携してやっています。その場合の家庭訪問員は公的な人ではなく、

NPO の人です。雇用形態は非常に柔軟です。

ヘネシー：長野県の池田町でやっているのは、池田町で雇っている人たちだから、訪問する人は助産師さんです。その前に母子手帳をもらいにくるときにすぐに聞き取りをしますが、それはソーシャルワーカーです。そこで振り分けをする。池田町は実家で生んで 3 ヶ月後に自宅に帰ってくる人が多いので、お母さんが帰ってくるとすぐに訪問する形でやっています。

質問者：家庭訪問サービスの定期的な評価は、ご家庭のお母さんやお父さんが評価するのですか？

ケート：そうです。全部がそうではないですが、州によって家庭訪問員と違う場所に評価するオフィスがあって、そこから家庭に行って、お母さんたちに尋ねます。評価の過程は、州によってセットアップしているところがあり、何年か後に査定する人がきて、HFA で作った委員のグループ、訪問サービスの対象となった家族を卒業して、顧問員になった人が家庭を訪問して、私も訪問を受けた経験があるからと、お父さんやお母さんの意見を聞いたりします。いろいろなやり方で評価します。

質問者：訪問を受ける人を見分けるとき、最初にスクリーニングして、2段階目に詳細なアセスメントするのですか？そのアセスメントはソーシャルワーカーがしているのですか？

ケート：各地域のプログラムによって違いますが、だいたい、スクリーニングをする人と、アセスメントをする人は、全く異なっています。アセスメントをする人は、ほとんどの人が、何か学位を持っています。ソーシャルワーカーとは限らないけれど、学位を持っている人たちで、HFA の 1 週間のアセスメントをする研修をきちんと受けた人たちです。

ヘネシー：オレゴンのプログラムの場合は家庭訪問員がアセスメントをします。ふるいわけ、アセスメント、家庭訪問支援と 3 段階あります。オレゴンの場合はふるいわけによって、この家庭は家庭訪問必要となって、家庭訪問員が最初に訪問したときにアセスメントをします。

質問者：そうすると、家庭訪問員と、家庭との間の契約はどのようにするのですか？

ケート：基準の中には、契約をちゃんと結びなさいとは入っていません。その代わりに、州で家族がこういうことにサインをしなくてはならないと決まっています。オレゴンではスクリーニングに行ったときに、これから質問するので、それを承諾するならここにサインして下さいというところから始まります。

守秘義務のための用紙があって、それにサインをしてもらって、「ふるいわけによって、頻繁な家庭訪問サービスを受ける資格があります、受けますか」と尋ねます。受けるとなると、ここにサインして下さいと伝えます。このようにして、このサービスは強制ではないことを示さなくてはなりません。それから、目標を設定します。オフィシャルではないですが、お互いの契約になります

一番大切なことは、これは強制ではないプログラムだから、家族が嫌になったらいつでも断ることができることです。プログラム自体が興味のあるプログラムにしないと、家族は嫌というから、責任は訪問するプログラムにあって、家族にあるのではないのです。家族

が首を長くして待っているような訪問にしないと続きません。

質問者：家庭訪問員の年齢は何歳ぐらいですか？

シドニー：年齢はまちまちで、学校を出てすぐの20代もいます。若くても人間関係がとても上手にとれる人になら雇用します。ケートのプログラムでは60代、70代の家庭訪問員もいます。若い人を雇ったときは、家庭訪問員を続けることはなかなかしないで、社会福祉や児童福祉の次のレベルのプログラムにいてしまいます。そのため、HFAのトレーニングはすごくいいのですが、長期にわたる雇用がなかなかできないのです。お金をかけて訓練するので、私たちの望みでは最低5年はいてほしいです。

ヘネシー：オレゴンの場合は、専門家を呼んで、1週間、宿泊代を出しているのでトレーニングを受けた人がすぐに辞めてしまうと、とても困ります。

質問者：日本では子育ての経験のない若い人が訪問すると、子育ての経験のない人に相談できないと言って、相談しない傾向もあるかと思いますが、若くても人間関係をよくするためには、そのトレーニングが必要なんですね。

ケート：シドニーさんは最初の家庭訪問員に雇用される時、この人は、23歳で若すぎると言われました。けれども、彼女の成育歴に人間関係を築くときにとても大切なことを知っていてできると思ったので、試験的に雇ってみることになりました。23歳で雇われることは少ないです。私のところでは、雇うときにロールプレイのようにインタビューして、このときにあなたはどうしますか？と聴きます。それでわかります。お母さんと家庭訪問員とのマッチング、相性というものもあります。

質問者：研修が大切だと思いますが、厚生労働省では今年の4月から、訪問事業が始まっていて、全国の自治体の7割が手を挙げたそうです。ただ、ガイドラインはあるけれども、研修は統一されていないそうです。HFAの話聞いて、研修がとても大切だと思います。日本では、HFAが現在やっているような研修をすべて取り入れるのは難しいと思いますが、HFAも始めたときに、最低基準の研修、ここは外せないというものがあつたと思います。どこの部分から研修を始めたらいいのでしょうか？

ケート：家庭訪問員が最初に受ける5日間の研修では、1日目に、強みに焦点を置いた哲学の研修があります。それが一番大切です。そういう見方で家族を見ることを学びます。2日目は、家族と赤ちゃんとの愛着の絆をつける相互作用、それをどのように観察してどういうところで褒めて、どういうところで教えていくか。抱き方とか、こうしたら抱きやすいでしょとか伝えながら愛着関係について学びます。これが2番目に大切なことです。3日目は、家族支援ワーカーはどんな戦略を使って家庭訪問をするか、戦略、いいところを強調する方法を学びます。4日目は家族全体の機能、成長をどうサポートするか、そのサポートの仕方を学びます。5日目は、大人の学び方を学びます。大人は自分の昔の経験と照らし合わせて、新しいことを学びます。成人教育の基礎、大人はどのようにして学ぶのかを理解します。訪問時の

戦略を立てるために必要な学びです。

ヘネシー：大人の学び方を知っておかないと、子どもなら暗記させるとかあるけれど、大人の場合は考えさせないといけません。自分の経験と照らし合わせて、これが悪かったとか、これは良かったとか、照らし合わせて学んでいきます。

オレゴンでは、最初の日には家庭訪問員が行くと、ふるいわけでこの家庭はちゃんと訪問しなくてはならないと決めて、家庭訪問員が行ってチェックリストをします。そのときに、最初の人間関係を築くために、いろんな道具を持っていきます。そのため訪問には2時間かかります。

その訪問時に、地域の人たちが作ってくれたキルトを持って行って、「地域の人たちも、あなたの赤ちゃんが生まれたことを喜んでいます」と伝えます。そして、そのキルトを床に敷いて、赤ちゃんを1日5回、1回につき3回腹ばいにするようにと伝えます。

なぜかという、腹ばいにするだけで、だんだんと赤ちゃんが首を持ち上げようとして、首が強くなる、ハイハイもするようになるからです。アセスメントしながら、「これはどうやって使うんですか？」「腹ばいは1日、何回するんですか？」と尋ねて、お母さんが「5回です」と答えたら「そうです。素晴らしい」と言って褒めます。

次に訪問したときには、白黒のデザインの本を持っていきます。赤ちゃんを抱いて、お母さんから20センチから30センチ離れたところからその本を見せると、視覚がとてもよく発達します、白黒のデザインの本は脳を発達させる教える内容で、脳の発達について親に教えながらやってみよう促します。

本を読んであげることは、早くても早すぎることはなくて、胎児のときから読みなさいと言っています。黒の下地に白い乳母車とかが浮き出ている、白の下地に黒い犬が浮き出ている、視覚にいい刺激を与えます、お母さんは、ワンワンちゃんがね、と話しながら子どもに見せる。そういうやり方を学んでいくことが大切です。その黒白の本が売り切れてしまって、黒白のデザインをたくさん刷ってホチキスでとめて作ったものを見せています。

質問者：そういう道具は、皆さんで考えたものですか？個人で考えたものですか？

ヘネシー：脳の発達に沿った教える内容があって、それをもっていくのは、州が助成金で買ったりしています。自分たちで作ってもいい。そうした道具を使って、お母さんたちに、赤ちゃんの視覚の発達について教えながらやります。来週までに続けてと言っていて、来たときには、続けていますかと尋ねて、やっていますとお母さんが言ったり。もしやっていなかったら、どうしてそのようなことが大切なのかを説明します。

質問者：私は地域で民生委員をしています。そのため、この家庭は問題があるので、見て下さいと依頼があって訪問するんですね。家にいる気配はあるのですが、ドアを開けてくれません。ドアを開けてくれるまで、忍耐強さが必要だと言いましたが、どういう風にすればいいのでしょうか。私はメモを置いてくるんですが、それでもなかなか開けてくれません。最初は1週間に1回、2週間に1回、とだんだんこちらも根気がなくなってきました。

て・・・。忍耐強さということ、3ヶ月の間にどのような工夫をしていらっしゃるのでしょうか？

ケート：そのようなときは、独創的なことを考えなくてははいけません。どういう風にしたら、このお母さんはニコッとするか、考えます。ある家庭訪問員の1人は、ドアを開けてくれないお母さん宛てに、おりがみでオムツのような形に折って、そこに「オムツを取り替えるように、あなたも変化が必要です。私の次の訪問は何日です」と書いて置いていきました。そのような笑いを誘うようなことを考えると効果があります。

たとえば、外で会いましょうとか、公園で一緒に話をしませんかとか、と伝えるのもいいです。書き方も「あなたに会いたかったのに残念でした。もう一度また来ますね」と心をこめて伝えます。ノートもかわいい紙を使って書いたものを置いていくといいです。

質問者：民生委員のメモ用紙ではだめなんですね。

シドニー：ノーノー。見ただけで破られちゃう（笑）。

1番いけないのは、問題があるから民生委員さんが来ることをみんなが知っていることです。外からの目を緩和するための訪問の仕方をしなくてはなりません。

質問者：そのメモを使うように言われています。

ヘネシー：それはそう言うほうが間違っています。

ケート：留守番電話に入れるのもやさしい言い方で、本当にお会いしたかったのに会えなくて残念でした。また来ますね、という言い方で残しておく。電話の方が、書いたものより効果的なこともあります。

質問者：訪問してドアを開けてもらったら、足の踏み場もないくらい汚れていたらどうしたらいいのでしょうか？

ケート：もしもそれが、生命に危険を及ぼすようなものでなかったら、まずは親との人間関係を築くことに焦点をあてます。最終的には、どうしたら、赤ちゃんが健康に育つことについて教えて、ゴミが散らかっている部屋は、赤ちゃんが健康に育つ環境ではないと伝えます。いい人間関係ができて、信頼関係ができれば、そのようなことが伝えられます。そこまで目をつぶる。そんなときこそスーパーバイザーが必要です。ゴミが多くて気持ち悪いと相談してきちんとスーパービジョンを受けます。親といい人間関係ができれば、何を言っても、お父さんやお母さんは話を聴いてくれます。一緒に子どもの安全な環境を作っていきます。汚いとか、裁いてはいけません。人間関係ができなければ、訪問もできませんから。

質問者：地域とのつながり、隣近所の理解が必要な場合もあると思いますが、家庭訪問員は、隣近所にもアプローチをするのですか？

シドニー：メインの人間関係は家族なので、他の人と話すことはしません。家族が近隣の人を呼ぶことはあります。そのときは、その人たちを含めてのセッションになるかも知れません。た

だ、家庭訪問員として隣近所に行くことは絶対にしません。

口コミで、あの家庭は、訪問したほうがいいと紹介されることはよくあります。たとえば、私のいとこは子どもが生まれたばかりで、訪問したほうがいいのか。そのときはまた新しい家庭訪問員が1対1で関係を作っていきます。同じ家庭訪問員が行くことはしません。お父さん、お母さんとの1対1の関係をとても大切にしています。

質問者：里親の訪問を考えたときに、家庭訪問する人の力が入りすぎてうまくいかずに挫折することがあるのではないかと思います。支援を継続するためにどんなことが必要ですか。

ケート：家庭訪問員として誰のニーズのために行くのか。それをいつも頭に入れておけば、これは力を入れすぎた、ということもわかります。家庭訪問員がお父さんやお母さんにかかわりすぎることがあるときは、スーパービジョンで、あなたちょっとやりすぎよと伝えます。これも並行過程で、家庭訪問員があんまり親にやりすぎると、親は聞かなくなります。そうすると、今度は親がやりすぎて子どもも親の話を聞かなくなります。

シドニー：私は6歳の子どもの里親をしたことがあります。この子はネグレクトされてちゃんと育ててもらえなかったから、私が取り返して育てなくてはならないと思いました。でもやりすぎると子どもは自分では何もできなくなります。

子どものニーズをあまり考えずにやりすぎてしまうのは、“してあげたい、してあげたい”という里親さんのニーズです。それ頭において訪問しなくてはなりません。また、実親を悪い親と見ないで、どんな親でも本当はいい親になりたかったんだ、ということを里親さんに悟ってもらうことが求められます。そして、私が親の代わりというより、実親は本当はいい親になりたかったけれどもなれなかった。そこから、今、この子に必要なものは何かに目を向けます。自分が与えたいというよりも、この子のニーズに焦点をあてます。家庭訪問は、そのような家族のニーズに焦点をあてた支援が必要です。